

## 大正生まれの宿命(二)

福岡県 竹下 繁

無人島での食べ物豚肉のみで、胸やけをなだめながら適時に食しました。一番大切な見張り役は、椰子の木に交代で登って、沖合を航行する友軍艇との連絡を手旗信号で送る。その場合、全員で所在を知らせるような手はずになっておりました。

三、四日はすぐに過ぎ去り、焦りが見えた頃、全員が椰子の木登りの技術を会得しました。木の高さは六〜八メートルのものばかりで、人間死を境にすれば不可能ということはないと知りました。

実は数日前に敵機数十機の空襲により、主力の食糧庫が徹底的に破壊され、戦闘用の主食や副食品、調味料に甘味品、酒等、特に砂糖の被害は大きく、その焦げる臭いが数日間続きました。

敵の目標は「兵糧攻めで戦闘力の喪失」を狙ったと私なりに思いました。防空対策のための防空壕の構築は予想以上に進捗して、旬日にして兵舎は壕の中に埋りました。いよいよモグラ生活という情け無い状態が実情で、高さは中腰程度で立ち居振る舞いには難色がありますが、幅は充分でした。

灯りは重油を使用するので、みんなの鼻は初日から真っ黒となり、困る困ると言いながらもいつまで生きていられるかを考えると、深く考えないのが当時の心境でした。

防空壕掘り作業の次は、食糧の自給態勢を作ることで、各中隊ごとにジャングル伐採が始められました。

この頃、入隊して一年半で選抜上等兵に指名さ

水分補給には椰子の実以外は、夕立を集めた飲料水しかないので、椰子の実採りにも木登りは必要でした。

ラバウル島に帰島出来たのは六日位経過した頃でした。見張り役の知らせで全員手旗信号で通報し、幸いに友軍艇が気付き助けてくれました。

この友軍艇は遭難した我々の救助のために派遣されたものだと思船してから知らされました。これが三度目の命拾いになりました。

我々を乗せた友軍艇は敵襲を警戒してラバウル島へと向かいました。幸いに敵機の爆音も聞かず、目的地の島影が見える範囲に達したところ、ラバウルの空には濛々と黒煙が吹き上がり、物の焦げた臭いが漂っているので不思議に思いました。

れました。中隊では十二人でしたが後続兵が来ない我々には、内務班ではまだ初年兵でしたから、進級した感激は湧いて来ませんでした。

この島には我々が上陸して以来、日本の輸送船の寄港は一隻もなかったと聞きました。我が中隊は、中隊長が東大農学部卒業でありましたので、小隊長が食糧の自給自足態勢づくりについて、今後の構想が語られたと聞き、楽しみと生命の安心感を得ました。

作業は先ず、我が中隊ではさつま芋畑づくりから始まりました。畑作りが七〇%程度進捗した夜、中隊長の命で海岸に浮かんでいる芋づるの苗を採集に行きました。この苗は潜水艦で運んで来たのだそうです。深夜手に入れた苗は、早速翌朝から中隊長の植え方指導が始まり、多数の人手で広い耕地も瞬く間に一面に植え付けが完了しました。

さらに中隊長の指導で陸稲、オクラ、現地人が食しているタピオカなどの栽培と椰子酒づくりや椰子の実から油作り等を行い、我々の生命の恩人

は中隊長であると断言出来る程に皆が勇気づけられました。

南方の生物はすべて成長が早い。もともと耕地はジャングルを切り開いた所で、永年の栄養素が蓄積されているから手間いらずでした。この開拓では蛇ややもり、蛙等は見つけ次第に貴重な蛋白源とばかり逃さず食することにも上手になり、恩恵に預かりました。

三カ月位から自給自足による食事は芋と芋の葉が主食・副食となり、毎週日曜日の昼食だけが小さな湯呑一杯分の量の米飯となりました。この時の配給がなかなか難しく、配給係は押さえつけないように、また空間をつくらないように留意し、隊員は各人自分の食器をもって、多いとか少ないとかの声が飛び交う有様でした。また月一回は椰子酒が盃二杯分位飲めるようにもなりました。

この芋が主体の食事は引揚船に乗るまで続き、自分ながらこれでよく帰国まで体力が維持出来たものだと感心しました。しかしこの間、腹はいつ

船工兵隊は分散させられ、私は一時、歩兵隊の山形中尉の中隊に編入させられたこともありました。

この年の年末には、以前の野田大尉のもとで夜間行軍が実施され、完全軍装で三、四時間山岳を歩き目的地の頂上に登りつめ、日の出を待ってはるか東方に向かって、中隊長の号令一下「捧げ銃！」、久方振りの士気高揚と必勝を誓い合いました。

敵機の襲撃がまるで訓練にでもくるように、週二・三回低空飛行で機銃掃射をしかけて来ました。

ある朝、整列をしていた時、突然、山間いの上空から低空で進入し、機銃掃射と小型爆弾が投下されました。我々は脱兎のごとく最寄りの防空壕に飛込んだその瞬間、閃光が走って破裂音と共に土砂が崩れ落ちて、壕が三分の一度埋ってしまいました。この時はもう駄目だと観念しましたが、砂かぶりだけで我に返り、お互いに無事を確認し、敵機のいないのを確かめて外に飛び出しました。この数秒の差が生死を決めるといふ場面に遭遇し、

も緩みっぱなしでした。また栄養不足で南方特有のマラリア病、熱帯潰瘍などがはびこり、この病気には、私の周りの人達は総て体験させられました。軍医及び衛生兵さんは、限り有る薬品を有効に使用し、現地で薬草として採集出来るものがないかと、空襲の合間をぬって調査研究をされていました。

制空権を持たない戦地では、敵の上陸に対してどのようにして戦うか、戦力の温存が第一でありました。時々訪問してくる敵機は、日本軍の無抵抗を見抜いてか、悠々と上空を飛び、突然、低空飛行で機銃掃射してきます。まるで練習飛行のようで腹が立ちました。

昭和十九（一九四四）年後半頃になると、戦争は日本本土に近いこの前線からは遠い、後方地域で行われている模様であるとの情報を聞くようになりしました。

今までの空襲で、我々中隊の所有するすべての舟艇は使用不能となっていたので、艇を失った船

これも亡父の導きと手を合わせ、四度目のお助けに感謝しました。

この爆撃で困っている対空用の偽装した設備はすべて吹き飛ばされ、付近の椰子の木には無数の砲弾の破片が突き刺さって、爆撃の凄まじさを感じました。

この頃、小隊長の話の中ではサイパン島の玉砕やフィリピンに敵が再上陸を仕掛けたとかが語られ、我々も日本の劣勢を認め合いながら、戦争は日本の本土近くで行われていないが：などと話し合っていました。

我々の作業も、敵の上陸に備えて専ら敵戦車攻撃の訓練となり、その武器として、竹の先に円板型の爆弾を挟み、信管をつけ、目的の戦車のキャタピラの下に敷き、爆破し、立ち往生させ、最後に榴弾で相手を殺すという作戦でした。文字通り正しく特攻隊でした。この訓練の合間には、爆薬作りで運ばれて来た管を抜いた爆弾から爆薬を作る作業でした。

汗と弾薬の粉末でたちまち眼が痛くなったり、嘔せ返り、タオルは用をなさず「ええ、どうでもなれ」の心境で作業を進めました。もしこの島が日本と陸続きなら、恐らく逃亡兵になっていたかも知れないと思う程でした。

昭和二十年の新年も、確か、夜間行軍中に迎えたように覚えています。私はこの年に兵長に進級しました。

この頃には、沖縄諸島が攻撃されていると噂も広まりました。また本土空襲も激しくなっているとも……。

我々の反対側に少数の敵軍が、上陸を試みたとの緊急報で、いよいよ決戦と緊迫した空気が漂いましたが、すぐに撃退の報せでホッと胸をなで下ろす一幕もありました。

この島に上陸した頃は、我々は第一線だと自負しておりましたが、今は既に後方となり、島流しの状況を思いますと、この戦争のむなしさを考えるようになりました。

りで、その上我々兵隊は連合軍の労働使役として島々に連行され、男性機能を去勢される等々のデマが乱れ飛ぶ有様でした。

それでも悪い話ばかりでなく、小隊長より輸送船が迎えに来るといふ話が伝達され、喜びを与えてくれました。一日も早く乗船できる日を健康で迎えねばと思いました。

空襲と訓練がなくなり、連合軍の上陸までは食糧確保に務めながら、夜は雑談に花が咲き、妻帯の古年兵は今まで一度も我々に披露しなかった家族写真を見せ、馴れ初めと子供達の思い出話を楽しく語り合う姿もありました。

現地人達も、日本の敗戦を知ってからは、一部の者の態度に変化が出て、我々が楽しみにしていた椰子の実の採取が困難になりました。軍司令部では、この現状に軍隊組織の維持と、階級章の着用命令が出されました。

敗戦の悲哀は、数日して豪州軍の進駐から始まりました。先ず武装解除が行われ、各人は最後の

昭和二十年八月十七日、突然、中隊に非常召集がかかりました。壇上上がった中隊長の緊張した顔がただならぬ気配を感じさせました。その言葉は思いようもない発言でした。「天皇陛下の戦争終結宣言」が二日前の十五日になされたと言うことでした。事実上の敗戦である。聞いている内に涙がぼろぼろ流れました。残念無念、全将兵が切齒扼腕しました。

兵舎に帰って数時間後、お互いの興奮がさめて同年兵同士の話になり、広島・長崎に原爆と言う新兵器が投下されたと言うニュースも入って、この爆弾投下で「日本は降伏」したと伝えられました。

一つの爆弾で、すべての生物が焼き尽くされてしまった。恐ろしい新兵器だと言う話しが終日続きました。そして、この部隊には、広島出身者が多く、広島市出身の大黒中尉が留守家族の安否を気づかっておられました。また東京をはじめ、主要都市は焦土と化してしまつたとのニュースばかり

兵器の手入れをして指定の場所へ持参して、整然と配列しました。わずかに銃剣数丁が中隊に護身用として使用が認められました。兵器の引渡し場所は、ラバウル湾を取り巻く海岸線で、そこに配列されました。そこには見る限り砲弾の山で、その他兵器の数は驚くほどで、よくこれだけの兵器が空襲から逃れたものだと感じました。

この兵器の処理も、日本軍の役目で、海中投棄が大半、日本刀は進駐軍将校が家族への土産にしたようでした。我々日本軍は総て丸腰で、総ての者が労働部隊へと変身しました。

進駐した豪州軍は、日本軍を一万人単位に編成し、作業は、この地の施設の建設作業でした。並行して近郊の島々からの日本兵の集結も行われました。その中にはガダルカナル島からの兵隊もいたと聞かされ、よくぞ頑張ったなあーと、その生命力には驚きました。

集団兵舎は従来通り椰子の葉を編んだ屋根と壁造りで、柱は雑木を用いました。進駐軍より特に

指摘されたのは“トイレ”の深さで、従来の二倍位の約六メートル程度でした。さすが外人は衛生観念が違うなあーと思いました。

所持している銃は自動式で、見た眼にも軽そうで、保管は勤務以外は折りたたみ式のベッドの下に置き、非常の時には素早く役立つように、身近で合理的に考えられておりました。すべて個人の命を尊重する基本的な考え方が、日本とは一八〇度違い、今後の日本は大転換を計らねばならないと思いました。

将校も自分の当番兵は個人雇用で、敬礼も一日一回ですむそうで、将兵共に和気藹々の姿には我々には大変勉強になりました。また食料品についても教えられるものが多々ありました。

我々の願望である帰国の第一回は昭和二十年の年末近くと記憶しております。順次輸送船が入港するという、明るいニュースが我々に希望を与えてくれました。

自分の体調は自分で調整し、作業ものんびりと、肉親と会える」と勇躍して輸送船に乗り込みました。

日本へ向けての輸送船内では、武器なし、軍人でなし、ただし組織は生きている。帰国するまでは今まで通り仲良く命令に従いながら、有終の美で最後の別れをしようと、我々の混成第四連隊第三中隊は団結しました。

しかし階級章を取外した人が多いので、自然と皆の人達が「自分のことは自分でする」ことに変わって行きました。

我々は先ず今後の生活の不安、家族との再会、被害の状況等大きな悩みを語り合い、助言を合いました。上陸地が名古屋港と知らされたのは、出航してから三日後でした。祖国近しの報せは入港前日で、その夜は興奮して睡眠不足になりました。

当日を迎え、港を眼の前にして、甲板上には人・人の山で、初めて目にする富士山ははるか沖合で二年六カ月余の軍隊生活を思い浮かべ、よく

要領よく仕事することも覚えました。休日には演芸会も催されることもありました。何分一人余りの人の内には、入隊前に芸人や演出家、舞台関係者、歌手などの経験者があり、演劇の女形姿には色気と共に艶やかさがあり、見物の兵士達を興奮させました。偽物と判ついても譚言たむことまで言う者さえ出る始末でした。

こんな状況下の集団生活で早くも社会人となり「コックリさん」と言う占いが流行し、引き揚げの時期とか、親、兄弟の安否等の占いをお願いし、その結果に一喜一憂することもありました。

中隊内では、各人思い思いの寄せ書き綴りを全員に手渡されました。私は今でも大切に保存し数十年前の思い出としております。

進駐軍の使役作業と、月一回程度の演芸会を楽しみながら十カ月位過ごしたある日、我々の部隊に帰国近しの朗報があり、皆一遍に元気が出て、早速手製のリュックサックに被服などを入れて待機すること数日。乗船が現実となり「祖国へ帰れ

ぞ生きて帰ることが出来たと思わず感激の涙が流れました。

それにつけても武運拙く戦死された戦友の顔を思い浮かべ静かに安らかなご冥福をお祈り致しました。

船はすべる様に速度を落とし岸壁に近付いていく。すると我々が感慨に耽っているのを邪魔するかの様に、大きな嬌声が足もとから聞こえて来ました。見ると数隻のボートに日本女性と連合国軍兵士との戯れている姿でした。

これからの生活には避けて通れないであろう。敗戦国民の惨めさを嫌と言うほど味わうことを覚悟せねばと思いつながら下船を素早くすませ、港の近くにあった元航空機製作工場跡に宿泊しました。その日は昭和二十一年五月十五日の夕刻でした。大正生れの私達の仲間は、満州事変、上海事変、支那事変、大東亜戦争と、祖国のためにと血を流し、傷つき、多くの犠牲者を出し、戦後の苦しみ

に耐え祖国再建に努力し、今日の日本を築いて来

ました。これこそ正に大正生れの宿命ではないだろうか……。

### 学徒兵として応召、 三年間の思い出の記録

富山県 山下嘉平

戦後六十年の節目に当り、往時を回顧し、齢と共に去り行く記憶を呼び起こしつつ、往時の思い出をたどってみた。

昭和十八（一九四三）年十二月一日はいわゆる、学徒徴兵延期停止となり学業半ばにして入営となった。私の生涯において誕生日に次ぐ最も忘れられぬ思い出の日である。

先づ軍歴の概要を記すと、

入隊後二カ月を経て、歩兵第六十九連隊補充隊（東部第四十八部隊）の一期検閲終了。

昭和十九年五月一日、豊橋第一陸軍予備士官学校入校。

同年十月十五日、南方軍派遣のため博多港出発。マライポートデクソンにて現地補充教育。